

## 介護福祉士国家試験への支援対策

桑迫 信子・花畑 明美・戸敷 早苗

### Support programs for the care worker national examination

**Nobuko KUWASAKO・Akemi HANABATA・Sanae TOJIKI**

#### 1. はじめに

社会の高齢化率が加速する中、介護福祉士養成校にはニーズの複雑化・多様化・高度化に対応できる質の高い介護福祉人材の育成が求められている。国は、介護過程展開能力および実践能力の向上や連携能力など介護の質的保証を高めるため、2017年度から養成校に介護福祉士国家試験受験制度を導入した。本学でも、国家試験全員合格の継続を重点目標とし取り組んでいるところである。

本学の専攻科（福祉専攻）は、保育士養成施設等卒業者を対象にした1年課程である。福祉科目を幅広く学修することは、職業の選択肢を広げるばかりではなく人間形成に大きな影響をもたらす。また、国家試験合格という成功体験はこれからの人生における自信へと繋がる機会と考える。試験対策の取り組み内容を振り返り評価することで、教育的課題を明らかにし国家試験対策の基盤づくりを行うとともに、今後の効果的な教育支援につなげたい。

#### 1) カリキュラム構成と学習進捗の特徴

介護福祉士養成校のカリキュラムは、『講義、演習、実習』で知識と技術の統合を図る3側面の構成で、ことに1年課程では、1月末に実施される国家試験に照準を合わせた過密なスケジュールとなっている（表1）。講義や実習等を約10ヶ月間で同時進行的に展開するため、学生が学習上の混乱をきたす恐れもある。その為、4月に実施される実習指導者会で介護実習指導要項<sup>\*</sup>を提示し、学生のレディネスや実習目標の周知を図りながら現場指導を依頼している。

#### 2) 年間の教育的取組み

入学直後は、友人関係や勉強・実習への不安を抱えており、学習内容や環境への適応を目標としたクラス作りを心がけている（表2）。実習I（5月中旬）を契機に仲間意識が芽生え学習上の問題を見だし、学生同士や教員との関係性が深められていく。6月になると、国家試験問題集が出版されることをきっかけに学習の進め方を説明し、7月の国家試験申込時には具体的な試験内容とその評価について説明している。

---

<sup>\*</sup>実習目的、実習期間、履修内容チェックリスト、評価基準など全27頁からなり、全実習登録施設に配布する。

▼表 1. 介護福祉士養成 2 年課程と保育士養成等卒 1 年課程カリキュラムの比較

介護福祉士養成施設 2 年課程カリキュラム			保育士養成施設等卒 1 年課程カリキュラム 宮崎学園短期大学 専攻科 (福祉専攻)					
領域	教育科目	時間数	開講科目	時間数	授業形態	単位数	前	後
人間と社会	人間の尊厳と自立	30 以上	社会制度論	30	講義	2	○	
	人間関係とコミュニケーション	30 以上						
	社会の理解	60 以上						
	選択 (生命、数学、家庭、経営、社会、制度など)	120						
小計 240			小計 30					
介護	介護の基本	180	介護福祉概論 I	90	講義	6	○	○
			介護福祉概論 II	60	講義	4	○	○
			介護福祉概論 III	30	講義	2		○
	コミュニケーション技術	60	コミュニケーション技術 I	30	講義	2	○	
			コミュニケーション技術 II	30	演習	1		○
	生活支援技術	300	生活支援技術	30	演習	1		○
			生活支援総論	30	講義	2	○	
			日常生活支援技術 I	60	演習	2	○	○
			日常生活支援技術 II	90	演習	3	○	○
	日常生活支援技術 III	90	演習	3		○		
介護過程	150	介護過程総論	60	講義	4	○	○	
介護総合演習	120	介護過程演習	90	演習	3	○	○	
介護実習	450	介護総合演習	60	演習	2	○	○	
		実習 I	225	実習	5	○	○	
		実習 II - 1						
実習 II - 2								
実習 I								
小計 1260			小計 975					
こころとからだのしくみ	発達と老化の理解	60	発達老化総論	30	講義	2	○	
	認知症の理解	60	認知症総論 I	30	講義	2	○	
	障害の理解	60	認知症総論 II	30	講義	2		○
			障害総論	30	講義	2		○
	こころとからだのしくみ	120	心身医学概論 I	30	講義	2	○	
心身医学概論 II	30	講義	2		○			
小計 300			小計 180					
医療的ケア	50 以上	医療的ケア	60	講義・演習	4	○	○	
小計 50 以上			小計 90					
合計 1850 以上			合計 1245 時間			58 単位		

※日本介護福祉士養成施設協会主催 学力評価試験：4 領域 13 科目 (125 問) 1 回/年実施

▼表 2. 年間の教育的取組み

月	内 容
4	個人面談 (主に健康面、心理面、修学資金、就職希望について)、仲間意識を高めるクラス作り
6	国家試験問題集購入、学習方法について説明 (全体)
7	国家試験申込書類作成、受験説明 (全体)
8	カウントダウンカレンダー掲示による意識付け

10	個人面談（主に学習上の悩みや学習時間の確保について）
11	士気向上させるクラス作り、期日付き学習取組み目標設定のための個人面談、放課後学習の説明と実施、授業内協同学習の積極的取り入れ
12	国家試験に準じた学力評価試験の実施、過去問題への取り組み
1	学力評価試験結果による自己課題発見と学習の強化

## 2. 対象及び手続き

本学の学生を対象に 2017 年度から 2019 年度実施の学力評価試験の結果と、同期間の介護福祉士国家試験自己採点結果を累計調査した（76 名、回収率 100%）。またそれと同時に、質問紙調査を行い有効回答のみ分析対象とした。

倫理的配慮として、試験結果においては教育上の個人指導で使用するため記名式としたが、本研究以外に使用しないことと個人が特定できない配慮をする旨口頭説明した。また、質問紙調査は強制ではなく個人評価とは無関係であることを文章と口頭で説明し、用紙提出にてその同意が得られたものとした。

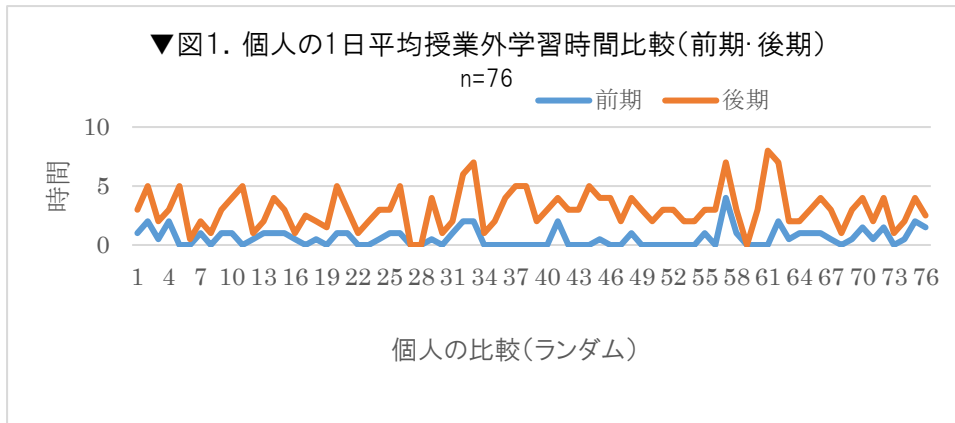
## 3. 調査と結果

日本介護福祉士養成施設協会主催の学力評価試験を実施する時期は、国家試験の約 2 ヶ月前で実習が直前までである関係上、学内での準備対策ができないのが課題である。しかし、これを機に徐々に授業外学習への取り組みが始まりクラス全体の士気が高まることに加え、全国での自分の学力が具体的に分かり個人の意識改革と集中力が高まっていく。

そこで、学力向上に向けた年間の教育支援方法を評価検討するため、国家試験終了後に質問紙を使った記述調査を行った。併せて、学力評価試験および国家試験自己採点結果の科目別評価を各試験終了後に実施した。

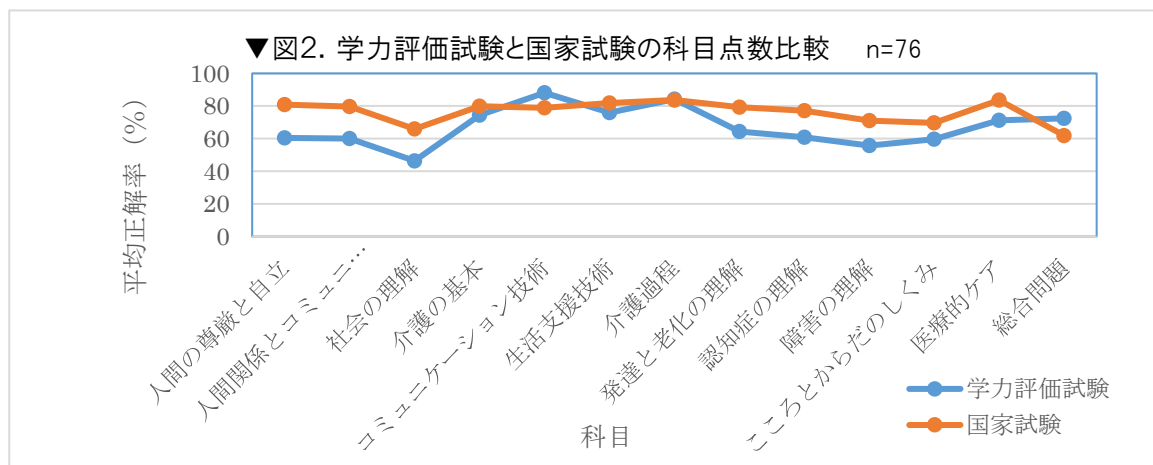
### 1) 授業外学習の意識付けと学習時間の確保

現代の若者は“さとり世代”などと表現されることが多く、結果重視で時間短縮を好むいっぽうで、無駄に時間を浪費する学生も多い。また、SNS コミュニケーションには長けるが言葉での表現が苦手、多数派集団に属し安心感を得るなどの特徴があるため、埋もれている学生の意見を引き出す関わりを心がけなければならない。また、専攻科は、これまでの学習環境への慣れや甘えから、「保育科では何とかしてもらえた」と指示待ちの傾向もある。「家で全く勉強したことがない」「試験勉強の仕方が分からない」という学習習慣のない学生もいるため、早い段階で意識的に働きかける必要がある。目標に向かって努力する学生を牽引役とし、指導のタイミングを見極め学習への意識を高めるよう取り組んでいる。後期授業開始時には、学生全体に①授業にあわせて教科書を読むことの重要性、②学習時間の確保、③実習事例の介護過程展開を大切にすることを説明すると同時に、再度面談を行い、アルバイトと学習時間確保について指導している。そして、随時授業態度や理解度、家庭問題、体調等を観察し、個別の状況に応じた関わりを継続して行っている。前期と後期の 1 週間平均の授業外学習時間を調査したところ、前期では全く授業外学習をしていなかった者が 48%（有効数 35 名）いた。後期になると、学習時間が大きく確保できている（図 1）。わずかでも、学生の変化を見逃さず個人の努力を称賛したり、生活態度を毅然と指導するなど、教員間で情報を共有し統一した対応を心がけ、学生の行動変容をもたらすことが大切だと考える。



## 2) 学力評価試験から国家試験までの学力変化

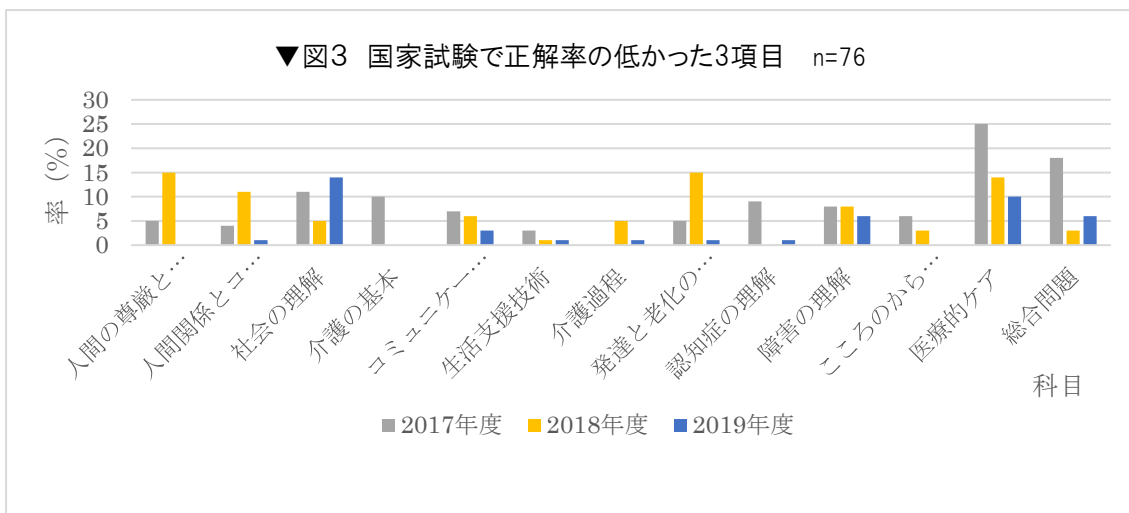
学力評価試験（2017年度 11/28、2018年度 12/4、2019年度 11/25 実施）の正解率と国家試験の自己採点結果を比較すると、約1ヶ月半～2ヶ月間でほぼ全科目の点数が伸びている（図2）。特に正解率が低く伸び幅の大きい「社会の理解」は、制度自体が細かく変化し苦手意識を持ちやすい科目であるため、教員が最新の問題を準備する必要がある。また、知識を定着させるために、類似問題に多く触れさせ『繰り返し学習』をしたことが、得点に結びついたのではないだろうか。逆に、点数が伸びなかった「コミュニケーション」と「総合問題」は、事例による文章読解力やイメージ力が求められる。今後の課題として、演習や実習で多くの『間接・直接体験』をさせ学力向上に繋げる工夫をしたい。



## 3) 苦手科目への対策

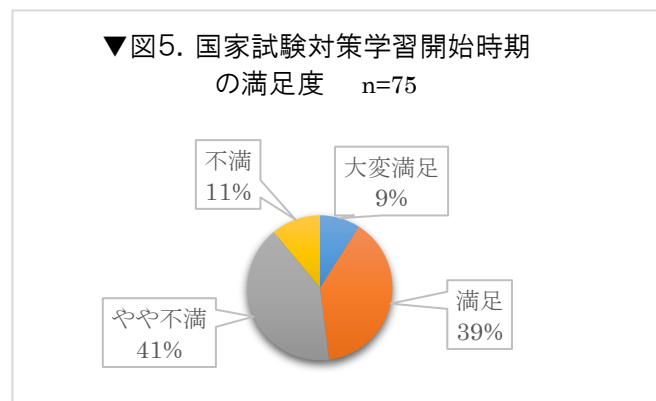
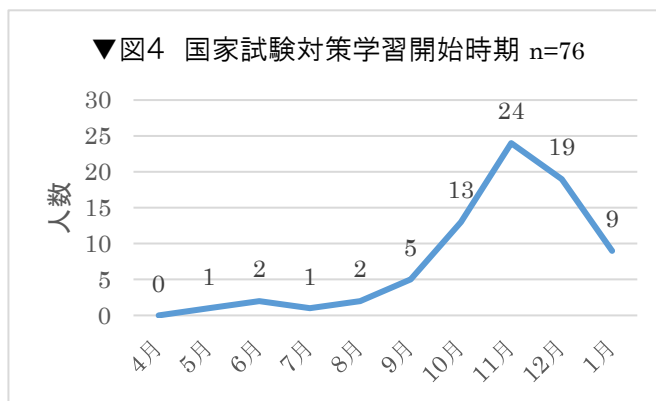
国家試験の自己採点で正解率の低い科目を3年間累積比較した（図3）。

「最も正解率の低かった科目から順に3つ書いてください」の問いで、年度毎にばらつきはあるものの、全体として「医療的ケア」「総合問題」「社会の理解」の割合が多い。内容としては、人体のしくみや疾患、法制度、そして事例の読解力が弱点である。これらの解決策としては、やはり教科書に立ち戻り理解させることである。そして、次の段階で過去問題を反復練習させながら知識の定着を図り、問いの表現に慣れさせるという手順を踏む必要がある。また、教員の授業展開や内容にも創意工夫が必要である。



4) 国家試験対策としての学習開始時期

主体的な学習への取り組み開始時期としては、実習が一段落し、学力評価試験が実施される11月・12月が最も多い(図4)。また、国家試験終了後に「学習開始時期をどのように自己評価しますか」との問いで満足度を調べてみると、「大変満足している」「満足している」と「やや不満」「大変不満」がほぼ半数であった(図5)。「大変満足」「満足」の理由は、クラスの一体感や学習の動機付けがあったこと、本人の明確な目標設定があり行動を伴ったことが大きく影響している。また、その過程において学習方法が身につく、知的満足感の獲得や、努力に値する結果が得られたことにより達成感が高まったようだ。これは、自己の努力と国家試験合格の手応えとが比例する結果だろう。いっぽう「やや不満」「不満」の理由は二極化し、問題を自己に焦



点化するタイプでは、『学習開始時期が遅く心がけに問題があった』とする者がいるのに対し、問題を自己以外に焦点化するタイプでは、『過密スケジュールをストレスに感じたり、早期に学習を始めても学習進度上知識が乏しく難しい』と不満を感じている学生がいた。本来、学習者として真摯な態度で学び、その集大成として試験に臨むのが理想であるが、学生のモチベーションを下げない配慮をしながら徐々に内容を発展させ、学生の気持ちに寄り添うことを心がけたい。また、極端に早い時期の叱咤激励は、過密スケジュールを抱える学生の精神的負担になる場合もあることを理解しておかねばならない。

そして、学生全体の士気を向上させるためには、全体を俯瞰しながらも個人レベルの問題点に歩み寄り軌道修正するなどの取り組みが必要だと考える。個人面談などで、学生の健康管理や生活管理を

行うこと、日々の授業や実習への主体的学習態度など学習者としての基本的姿勢を問いかけながら、団結したクラス作りに努めていきたい。

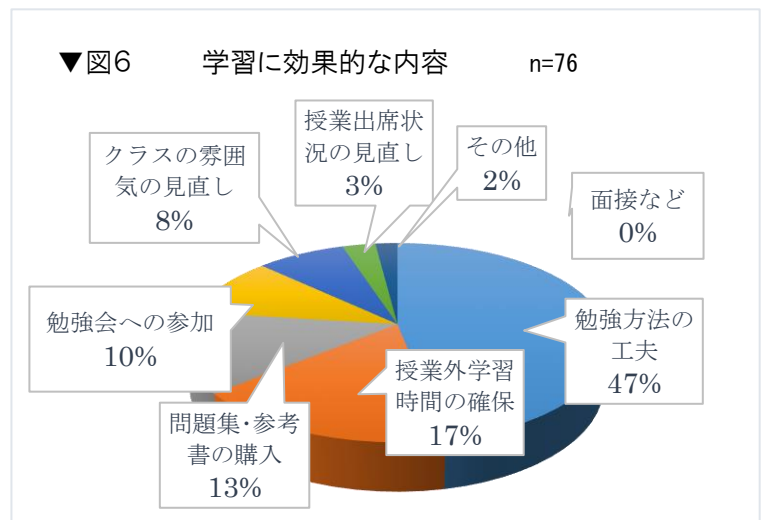
## 5) 国家試験後の学生の振り返り

### ①学生の考える“国家試験に臨む心構え”

1年間を振り返り「後輩へ伝えたいこと」を自由記述してもらった結果、学習面・実習面・健康面・アルバイト・その他の5項目に分類できた。学習面については、『授業を真面目に聞き、教科書に目をとおす。自分に合った勉強方法で授業外学習を早期に確立させ、細かく目標設定し、復習や苦手分野の対策をする。時間の自己管理が重要』とした内容であった。また実習面は、『事前学習や体験は国家試験に役立つ。根拠を考えながら実施するのが効果的』であった。健康面については、『試験に集中できるよう生活習慣を整え、体調管理を十分にすることが大事』とし、アルバイトに関しては、『授業との両立は難しい。短時間または週末だけか、11月には辞めた方がいい』と記載していた。その他、学生一人ひとりの意欲的な態度が全体の意識を高める大きな刺激になっていたようだ。

### ②学生の考える“学習に効果的な内容”

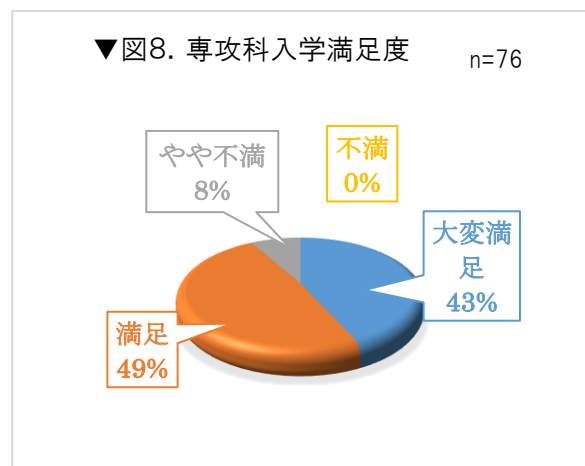
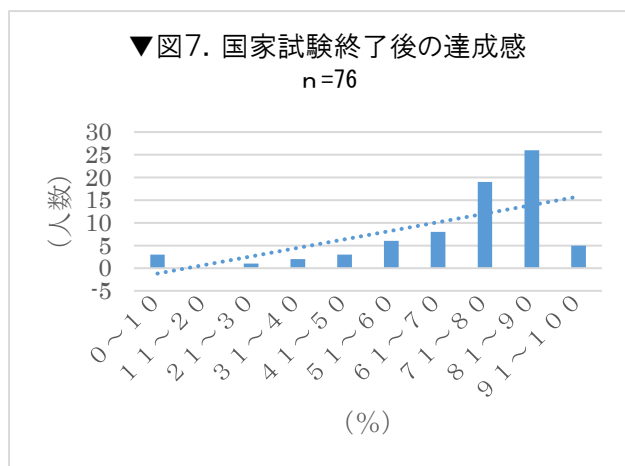
学習に効果的な内容について図6に示す8項目の中から選択(2項目)してもらった結果、「勉強方法の工夫と授業外学習の時間確保」が半数以上を占めていた。また、その具体策については、「自分にあった学習環境を整えることや、クラス内の相互作用」などが挙げられており、クラスの一体感が重要だと学生自身も感じ積極的学習者へ変化していることが分かった。まさに『受験は団体戦』である。



## 6) 学生の心理的負担となる“国家試験”の壁対策

“国家試験”という言葉のもつ緊張感が、専攻科入学に与える影響も課題のひとつである。そこで、「国家試験終了後の達成感ほどの位ですか」の問いに0～100%までの10段階で選んでもらった(図7)。また、「専攻科進学満足度はどの位ですか」の問いを「大変満足」「満足」「やや不満」「大変不満」の4段階で評価し、その理由を自由記述してもらった(図8)。殆どの学生が、70%以上の達成感を感じており、入学したことに「大変満足か満足」と評価していた。「やや不満」と感じている学生の多くは『国家試験対策の学習がきつい、もっと早く勉強すればよかった』が主な理由であった。先入観による国家試験のイメージを少しでも和らげ、それにも勝る成長があることを発信していきたい。

介護福祉士養成教育の最終目的は、質の高い介護福祉士の人材育成にあり、介護福祉士国家資格取得のみが目的ではない。新たな学びへの興味や期待が、“国家試験”という重圧で消され結果主義に陥らないよう注意する必要がある。くわえて教員は、普段から質問しやすい雰囲気作りを心がけ、入学時の学力差や個別性を考慮した支援方法であるか繰り返し評価することを忘れてはならない。



#### 4. まとめ

介護福祉士国家試験への教育支援対策として、以下の事項をあげる。

##### 1) 支援の体制整備

###### ①「年間の教育的取組み」の継続

入学後から国家試験受験までの10ヶ月間を、全体の士気が高まるよう段階的な指導を実施し、主体的学習者となれるよう導く。

###### ②教員の授業力向上と国家試験内容の熟知

担当科目の出題傾向を把握し、教科書を丁寧に読み解くことの重要性を説明するとともに、授業において解りやすい説明を行う。

###### ③教員間の情報共有と支援態勢

学生の知識レベルや学習面および生活面における意識や情報を共有し、指導の方向性を統一させ連携して対応する。また、毅然とした指導と努力への称賛をし、行動変容をもたらす働きかけをする。

###### ④「人間育成」に基づいた教育観

資格取得を目指し学問に対する探究心を育むのは勿論のこと、行事などでの自己表現や人間関係の構築、規律ある生活態度などあらゆる学びの機会を捉え、社会性と倫理観を兼ね備えた質の高い福祉人材を育てるという意識で関わる。

##### 2) 学習方法・内容についての対策

###### ①過去問題の確実な理解

履修状況を把握しながら、少しずつ過去の問題に挑戦させ出題傾向に慣れさせる。また、5問択一の正解のみを求めるのではなく、全てを理解できるよう調べ学習を促す。そして、基本的内容を確実に得点できるよう支援し、「分かる」という肯定感を積み重ねる。

###### ②苦手科目の克服

学生が苦手意識をもちやすい「社会の理解」「発達と老化の理解」「障害の理解」「こころとからだのしくみ」は、単語帳や暗記シートなどで問題に触れる回数を多くし、個人にあった学習上の工夫を促す。

## ③学内演習や介護実習での効果的な学習推進

事例問題や実践に基づく判断が求められる「生活支援技術」「コミュニケーション技術」「介護過程」「介護の基本」は、科学的根拠や思考過程、倫理観が問われる。演習や実習が貴重な経験になることを理解させ、効果的な成績向上につなげる。

## ④理解度に合わせた個別指導の推進

学力の個人差については、状況を確認しながら面接や指導を実施し、問題の意味の理解、教科書の読み返し、学習計画書の作成など手厚く支援する。また、協同学習での学び合いや教員に質問しやすい雰囲気作りも重要である。

## ⑤クラス団結への支援

新しい学習環境への適応や学習への意欲・関心の程度を観察しながら指導のタイミングを見極め、徐々に国家試験に対する働きかけを行う。クラス全体の学習への意識向上が図れるよう環境づくりをする。

## 3) 主体的学習習慣の確立

## ①授業の重要性、学習方法、相談などの具体的指導

入学早期に、教科書の読み込み・ノート作り・資料の整理など細かく説明し、課題の確実な提出方法に至るまで具体的に指導する。

## ②教授方法の工夫

課題提供や小テストの実施など、基本的知識を習得するための授業を工夫することで、学生が自己課題に対する学習方法を確立しやすくする。

## 4) 問題を解くスピード感や心構え

## ①読み解く早さの訓練

125問を220分で解くためには、1問につき1分45秒で進めなければならない。そこで、実際の練習問題ではタイムを意識した訓練を行い、継続して感覚を鍛える。

## ②解き方を知る

試験直前の対策としては分かる問題から解く順応性も大切である。マークシートの塗り間違いを起こさないことを大前提とし、最後に見直せる時間的ゆとりを残すことを目標とする。

## 5. おわりに

介護福祉士の国家試験制度は、資質の向上を目的に受験という形で資格取得の一元化を図るものである。時代に即した様々な福祉ニーズに対応できる人材確保が、介護の社会的地位の確立および処遇改善につながる一步と考える。しかし、学生にとっては国家試験への不安は大きく負担に感じる者が多い。指導上の留意点としては、個人差を見極め挫折感や過度の緊張を与えない配慮や、教員と学生が一丸となり取り組む姿勢が重要となる。介護福祉士資格取得が、学ぶ喜びを感じられ人生の自信や意欲に繋がるよう支援していきたい。

本研究は、宮崎学園短期大学教育研究（2018年度）にて「介護福祉士国家試験結果と今後の支援対策」に加筆したものである。



<参考引用>

第31回介護福祉士国家試験合格発表 受験資格別 (2019) 厚生労働省

<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000198330.html> (2020.01.28 閲覧)

介護福祉士の養成カリキュラム等について (2016) 厚生労働省

[https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu\\_Shakaihoshoutantou/0000142797.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000142797.pdf) (2019.04.03 閲覧)